

説教「2017、新たに生まれる」 山本護 牧師
聖書 アモス書8:11/ヨハネによる福音書3:3

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(ヨハネ 3:16)」。もう幾度も聞いた言葉であろう。だが、くり返し「神に愛されている」その内実を受け取り続けたい。クリスマス、「神は、その独り子をお与えになった」。何のためにか。神は、独り子イエスと同等に(それ以上か)私たちを愛してくださっている。それゆえ、永遠の命を与えて御自分の許に迎え入れたい、と願っておられる。「いわれなき私が、それほどまでに愛されている」だけでも驚きだが、永遠なる神の御許に迎えられる、とは仰天せずにはいられない。

「世を愛された」という言葉は、最高法院議員のファリサイ人ニコデモとのやりとりの後に記されている。イエスに神の真を感じながらも、周囲を巡るだけであったニコデモも、神に愛される一人ではなかったか。イエスはズバリと語った。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない(3:3)」。ニコデモは、子供の頃から培ってきた信仰基準と、真なる神の徴(3:2)で揺さぶられていた。彼は相当高い地位にいたがために、夜にこっそり訪ね(3:2)、既存の価値や評価(肉)よりも優先されるべき神の命(霊)に狼狽させられた(3:6~7)。ニコデモの知性なら比喻など容易に理解できたが、一步踏み出すことをうながされると、逃げ腰で幼稚に応答した(3:4,9)。イエスには、ニコデモの二心(ふたごころ)が分かっていた(3:10)。だがそれでも、余計な前置きなしに、いきなり核心を述べた。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない(3:3)」。つまり「君は道を求めているのだから、肉にしがみついていないで、霊によって新たに生まれよ」と暗に示した(3:6)。

ニコデモは子供の時から頑張り、周囲の期待に応え、一族の責任を果たし、自分でもその立派な「肉」が誇らしかった。ところがその一方、魂は渴いていて、イエスのふるまいに未知の希望を予感した(3:2)。

預言者は語った。「わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渴くことでもなく、主の言葉を聞く事のできぬ飢えと渴きだ(アモス 8:11)」。

そうだ、これなのだ。ニコデモには真なる「主の言葉を聞く事のできぬ飢えと渴き」があった。議員として「パン」は充分にあり、勤勉なファリサイ人として「水(聖書の学びや信仰)」も申し分なかった。しかし、飢え渴いていた。

教会ではさすがに、世の名誉や地位のような「パン」は求められまい。それでは「水」はどうか。「恵みのみ」を掲げながらも、「神への忠実」という応答が無言の内に強要されていないだろうか。あるいは個々人で勝手に自己規制をしていないだろうか。

もしも心当たりがあるなら、ニコデモのように魂が飢え渴くだろう。だから私たちは、イエスの言葉を、真剣に、自分の事として受け取りたい。

「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない(ヨハネ 3:3)」。

それでは「新たに生まれる」とは実際どういうことなのか。「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(3:16)」。

イエスの言葉、ふるまい、その出来事が、神に愛されている自分のためであった、と驚きをもって受け入れる事。そこから「新たに生まれる」現実が作られる。



【おまけのひとこと】

洗礼を受け 私たちは新たに生まれた だが洗礼は到着点ではない むしろ旅を始めたのだから場は刻々と変わる 今日この場で新たに生まれる 聖霊の風はこの場で 縦横無尽に吹く(ヨハネ 3:8)